

やまがら

バードウォッチング、あるいはバーディング。最近、息子と妻と一緒に野鳥観察を始めた。小生は小さい頃から蝶の採集・飼育を趣味にしてきたので、当然のように息子も蝶を好きになると信じていた。何度か野山に採集にも連れて行った。だけれども蝶に触るのが「怖い」と言う。そんな彼は、ある日、家の近くの電線にオスのサンコウチョウが止まっているのを偶然見つけた。長い尾と青いアイリングを持つ、珍しい夏鳥に出会えたことをきっかけに野鳥観察にハマった。鳥は怖くないのかと聞くと、「かわいい」と言う。遠くから見るという距離感が心地よいらしい。

それにしても、子どもの記憶力は凄まじい。

図鑑をパラパラ

めくっているう

ちに野鳥の名前

や生態をあと

という間に憶えて

いく。そして、

コガモとトモエ

ガモの違いが分からない父親にあだこうだと誇らしげに教えてくれる。分かってはいるけれども、息子に対する母親の愛情は果てしない。しょっちゅう近くの公園に連れて行き、一緒に野鳥観察をする。そのうちに詳しくなる。二人して今の鳴き声はヤマガラで、さっきのシジュウカラとは違うと教えてくれるが、こちらは何度聴いてもさっぱり憶えられない。悔しいので、毎日、YouTubeで鳴き声を一人聴くことになる。

野鳥観察は情報戦である。あの野鳥がいまここに出ているという情報が毎日のように飛び交う。情報を得たバーダーたちが各地にどっと集まる。バーダーたちは、洒落たアウトドア用品を身に着け、性別も年齢も多様である。そして、バズーカという武器を持つ。蝶屋が補虫網と三角紙で蝶を採集するのに対して、多くのバーダーは最新のミラーレス一眼と超望遠ズームレンズ（バズーカ）で野鳥を撮影する。ほと

んど野鳥は小さく、遠くにいて、素早く動くので、このセットが必要になる。とはいえ、子どもには高価すぎるし、重たすぎるので、運動会で兼用できる超高倍率コンデジを購入した。この武器と情報を頼りに一家で各地に出かけている。

「ここはバードウォッチングのメッカなんです」。財産区による拡大造林を学生と調査していたときに、現地の方から教えてもらった林道がある。すぐに一家で訪ねてみたら、たしかにたくさんのバーダーが集まっていた。3度目に野鳥観察に行ったとき、この林道のドンと思しきバーダーが「あそこにクマタカの幼鳥がいるよ」と息子に教えてくれた。指差す先は、川向

うの山腹であ

る。星のような

小さい光が見え

た。幼鳥の白い

腹部が朝陽にキ

ラリと反射して

いるらしい。橋

を渡り、できる限り近くまで歩いて行って、コンデジの倍率を最大にして覗き込むと、梢に佇む若いクマタカの顔がファインダーに入った。餌を運んでくれる親を静かに待っていた。

この4月、小生の研究室から最初の研究者が巣立つことになった。もう一人の息子だと思って、6年ほど一緒に調査や研究に取り組んできた。雪国の集落では住民の方々の声に耳を傾け、研究室のゼミでは後輩たちをまとめてくれた。欧州の国では一日に何本もない電車に乗り遅れそうになって二人して全力で走った。クマタカの親のように餌を運んだわけではなく、教えたことより教えられたことのほうがむしろ多かったように思う。そんなトンビの生んだタカが間もなく東北の天空に舞う。巣立っていく彼をじっと見守るのは嬉しくもあり、寂しくもあって、複雑な気持ちである。

(トンビ)

巣立ちの気持ち